

# 改刻の在処

——魯文『成田山御利生記』諸本考——

山 本 和 明

## 要 旨

仮名垣魯文による切付本『成田山御利生記』は、当時再建を目指して成田山の開帳が各地でなされた際に刊行されたものだが、その諸本を紹介したうえで、その本文・挿絵の改刻を巡る問題を具体的事例に則し呈示し、作品の内容からははかり知ることのできない対象の背景や刊行時期との関わり、また後印本における象嵌の改悪事例にもとづく問題点を提起した。

## はじめに

魯文には、成田山に由縁のある著作が主に三点存在する。一点は力士桂川力蔵の仇討靈驗記である『成田山利生角力仇討』（安政三丙辰弥生某日〈序〉・当世堂）、もう一点は、江戸から成田不動参詣の旅に出た弥二喜多両人の滑稽道中記『成田道中膝栗毛』（安政三辰孟夏新鐫〈序〉・新庄堂）で、ともに安政三年（一八五六）に刊行された。今回の考察では、その二点に先んずるもう一点『成田山御利生記』（安政元甲寅晩冬／同二乙卯新春上梓〈序〉）をとりあげ、その諸本をめぐる問題について考えたい。

成田山に関わる著作が、ほぼ同じ時期に相次ぎ出版されたのは、明らかに開帳を意識してのことであった。安政五年に成田山では本堂（現釈迦堂）を再建するが、それにさきだつて、同一年から建築資金を得るための開帳が奉修されている。第十一世照獄のもとで、安政二年二月二十八日から三十日間の居開帳（成田山内）が行われ、同三年には江戸深川永代寺八幡宮社内において百日間の出開帳、四年には再び二十日間の居開帳が成田山内で行われた。浮世絵にもなったこの開帳は人々の話題となったことだろう。こうした開帳に集う人々を目当てに作られた冊子の一つが『成田山御利生記』であった。まずはその梗概を示しておく。本書は上巻「相馬旧事」と下巻「絹川新話」の二作品からなる。

### 上巻「相馬旧事」

下総国神護新勝寺の本尊不動明王は、京都高雄山神護寺護摩堂の明王を成田の地に移し、広沢の寛朝大僧正が朝敵平将門降伏の護摩法を修したのに由来する。帰洛せんとする時、不動明王が盤石にして動かざることをもつ

て御堂をたてたのだという。その起因ともなった平将門伝承を語るといふ形で物語が始まっている。

朱雀帝の御世、瀧口小治郎平将門は、下総国猿嶋郡石井郷にて朝廷に叛逆を企てた。将門従弟六郎公連はそのことを諫め自刃した。承平二年、将門は比叡山において藤原純友と謀叛の共謀を盟約。以下、いわゆる承平・天慶の乱を詳述し、将門が貞盛の矢にあたり、藤原秀郷に討たれて、兵乱鎮まることになる。将門の首飛び来たつた処が神田明神であることなども含め、不動明王・寛朝大僧正を讃えて語り終える。

#### 下巻「絹川新話」

鎌倉時代の祐善上人一代記として、成田山不動明王の利剣靈験譚、羽生村累解脱譚の二つを軸に、その遷化までを語った物語となっている。方丈寺（増上寺）善通上人の弟子となった祐善は、生来の愚鈍ゆえに経文を覚えられず、自殺しようとする。ある夜、「成田山新勝寺なる不動明王に詣で三七日の断食なし、堂に籠りて肝胆を摧き折誓なしなば智恵を授す事うたがひなし」との夢告を受けて成田山に参籠し、不動明王の利剣を呑み智恵を授かる靈験を得て、高僧となった。その法力による死靈教化の話が続いて語られる。下総国岡田郡羽生村の累の家に入婿した与右衛門が、妻の醜貌ゆえに、絹川に突き落とし水中で責殺す。その後、与右衛門は幾人も妻を迎えるが、次々に死んでいく。六人目の亡妻の子である菊に累の死霊が憑き、二十六年前の悪事の怨みを述べる。それを祐善上人が感化して、死霊を解脱させたというものである。その後、祐善遷化までを語って、「実にはや仏法中興の名僧高德類ひなき大善智識とや称し奉らん尊むべし信ずべし」として物語を終える。

上巻「相馬の旧事」では、まず成田山の御本尊不動明王の縁起・由来を語り、ついで平将門の乱に紙数を割き、兵乱が鎮まったのち新寺建立とする成田山縁起からなる。下巻「絹川新話」は、祐善こと祐天上人が、成田不動の利剣を呑み智恵を授かった靈験譚と、羽生村の累の亡魂を解脱させたという物語であり、この話が元禄三年（一六九〇）

の『死靈解脱物語聞書』に書かれた逸話にはじまることは高田衛氏『新編江戸の悪霊祓い師』（ちくま学芸文庫）に詳しい。上下巻の間に、二話を繋ぐ言葉はなく、話の連続性をみることはできない。ただこの点について、作者鈍亭魯文こと仮名垣魯文は、その序において次のように述べている。

物を対するに。和漢両朝といふ。文武両道と称ふ。往古を当時に比するは。天を地にたくらぶる如く。善と悪とを並言は。雲と泥とを論るなり。されば相馬の旧事を。絹川の新話に對し。乾坤二巻を合したるは。泥龜に月下駄に焼味噌。ふさはしからずといふもあらんが。時代と世話の一席読畢。大小不同明王の。利益は一体分身にて。前後の靈験下総の。一國中の事にしあれば。勸懲両全なるを味ひ。看官文の拙きを。嘲ことなかれと云云

安政元甲寅晩冬同二乙卯新春上梓 物の本作者鈍亭魯文填詞（印（菱文））

「相馬の旧事を。絹川の新話に對し。乾坤二巻を合したる」との一節に明らかなように、いわばこの『成田山御利生記』は、成田山にまつわる旧事・新話を併せた持ったところに本書の特色を見て宜しかろう。

### 諸本一瞥

開帳に乗じての書冊であり、当然というべきか、かなり売れた本であった。今回、管見に及んだだけでも多岐にわたる。以下、確認し得た諸本についてまず紹介するが、早印と目されるのは当館所蔵『成田山利生記』（ナ4-698）である。書誌事項を摘記するにあたり、以後の論述のことも考え、A本B本……と仮に符号をつけておくことにする。

【A本】成田山利生記（なりたさんりししょうき）〔図版1〕

①書名 表紙題による。



図版 1

- ② ジャンル・書型 切付本二巻一冊
- ③ 刊年 安政二年刊(序「安政元甲寅晩冬同二乙卯新春上梓」)
- ④ 作者・画工 鈍亭魯文謹述、一容斎直政画
- ⑤ 序跋 自序
- ⑥ 版元 公羽堂伊勢屋忠兵衛板
- ⑦ 柱題 「霊験記上」(一〜廿四)「霊験記下」(一〜廿三)。
- ⑧ 構成 表紙・見返し・序文半丁・口絵二丁・上巻本文三二・五丁(うち挿絵7図七丁分含)・下巻本文二三丁(うち挿絵8図八丁分含)・後ろ表紙。

⑨ 奥付・広告 後ろ表紙が後補と目されるため奥広告等未詳。

⑩ その他 挿絵等に手擦れ多し。

以下、補足する。見返しの題は「成田山／御利生記」、内題・尾題は「成田山霊験記」である(なお当館作成の帙題は内題を採用し「成田山霊験記」としているが、今は表紙題に従って書名としてあげた)。摺付表紙には「成田山利生記」「直政画」とあり、不動明王が祐善に長剣を吞ましめ智を授ける構図が配される。見返しは、水茶屋店頭の床机(参拝の参道を彷彿とさせるか)と目印の幟に「板元」「成田山」「御利生記」と記した構図。作者・画工であるが、摺付表紙に「直政画」とある。序には「物の本作者／鈍亭魯文填詞」、上下巻内題下は、ともに「江戸鈍亭魯文謹述」。従って画工名は表紙題のみ存し、本文末尾にも記載がない。魯文と直政画の作としては、他に安政四年刊『江の島栗毛』『男達吾妻花川戸』や、『英名八犬士』がある。口絵挿絵等を閲るに、直政画として宜いと判断した。

口絵・挿絵ならびに端書で紹介を順に記しておく。

※上巻一丁裏二丁表（口絵）「天慶三年相馬將門王位を傾んとす広沢の寛朝大僧正勅命に依て高雄山護摩堂の本尊不動明王を成田の里に安置し朝敵降伏の法を修せらる」

※上巻四丁裏五丁表（挿絵）「公連將門を諫て義の為に刃に伏す」

※上巻七丁裏八丁表（挿絵）「將門純友比叡山上に会して謀反の一味合体の盟約なす」

※上巻十丁裏十一丁表（挿絵）「將門国中の美女をあつめて日夜遊宴し軍事を懈り奢修す」

※上巻十三丁裏十四丁表（挿絵）「秀郷將門に会して人主の器にあらざるを知る」

※上巻十六丁裏十七丁表（挿絵）「貞世討死を極て將門に別る」

※上巻十九丁裏二十丁表（挿絵）「將門力戦大勇をふるふ」

※上巻廿二丁裏廿三丁表（挿絵）「將門貞盛が矢にあたり最期秀郷走よりて首をとる」

※下巻二丁裏三丁表（挿絵）「師の坊祐善が鈍魯なるを励まさんため法衣をはぎ鉢助に預け給ふ」

※下巻五丁裏六丁表（挿絵）「祐善坊成田へ詣る道にて山賊に衣るい路錢をうばゝる」

※下巻八丁裏九丁表（挿絵）「不動明王尊体を現じて祐善に長剣を呑しめ智を授け給ふ」

※下巻十一丁裏十二丁表（挿絵）「羽生村の与右エ門絹川の辺にて妻の累を害す」

※下巻十四丁裏十五丁表（挿絵）「累が悪靈菊にまつはりて与右エ門に怨をのぶ」

※下巻十七丁裏十八丁表（挿絵）「祐善黒瀧におるて長恩を法問に帰伏さする」

※下巻十九丁裏二十丁表（挿絵）「祐善和尚累が悪靈を教化し給ふ」

※下巻廿二丁裏廿三丁表（挿絵）「祐善大僧正所々に於て御化益説法す」

版元だが、下巻廿三丁裏の巻末に「神田松下町伊勢屋忠兵衛板」とある。公羽堂伊勢屋忠兵衛については嘉永六年「地本草紙問屋名前帳」仮組に名を連ねる書肆で、「諸問屋仮組名前帳」(諸問屋名前帳 国立国会図書館編)湖北社刊・一九七八年)には「伊勢屋忠兵衛(神田松下町三丁目半六店、安政二年八月転宅同上新蔵店改名久助)」とある。本書に関する先行研究として、成田山靈光館が編輯作成したりーフレット、成田山ミニガイド『魯文作「成田山御利生記」(発行年未詳)があり、後に触れるD本にあたるもの下巻全文が、『祐天寺史資料集』第三卷(平成十八年五月刊・祐天寺)に翻刻される(当該書は船橋市西図書館所蔵本を利用)。また本稿注記に触れる別本<sup>1)</sup>については、高木元「鈍亭時代の魯文―切附本をめぐる―」(千葉大学大学院「社会文化科学研究」十一号・二〇〇五年)に指摘がある。

このA本と本文の異同が全くなく、表紙絵・見返し、奥付広告・後ろ表紙に違いがあるのが、次に示すB本(禾口庵文庫本)である。A・Bいずれを早印とするかは、A本の後ろ表紙が後補表紙のため、あくまで推定でしかないが、本文の摺り具合、ならびに本文に異同のあるC本とB本の表紙絵が同一であることを考慮し、B本をA本の改題後印本と推察した。そもそもA本表紙には、作者名「魯文」の記載がない。安政二年当時、まだ魯文の名を冠するほどではなかったか、とも想像するが、大方の示教を乞う次第である。以下、B本について摘記する。煩多を避けるため、A本と同一記載になる場合は適宜省略した。

【B本】成田山御利生記(なりたさんごりしょうき)《図版2・3》

①書名 表紙題による

⑥版元 公羽堂伊勢屋忠兵衛板、当世堂品川屋久助梓

⑧構成 表紙・見返し・序文半丁・口絵一丁・上巻本文二・五丁(うち挿絵7図七丁分含)・下巻本文三三丁

いられることから、むしろ後になってから角書が付いたと判断した。版元は下巻廿三丁裏の巻末に「神田松下町伊勢屋忠兵衛板」（A本と同一）、奥広告に「此外当世流行物板元江戸人形町品川屋久助梓」とある。参考までに、広告を掲げる。

新版大江戸絵図五枚つき長唄懐中本雪月花  
国芳雑画集初編二編三編四編義経一代記図絵全  
為朝一代記一勇齋国芳画全英名八犬士前後八冊揃  
はうた稽古本類義士肖像忠臣蔵一勇齋国芳画二冊  
読切一代記物当時講師名人の作敵討五十丁読切物  
此外当世流行物板元江戸人形町品川屋久助梓



図版 2

（うち挿絵8図八丁分含）・奥付広告・後ろ表紙

⑨ 奥付・広告 品川屋久助の奥付広告あり

⑩ その他 管見に及んだのは禾口庵文庫本

摺付表紙には「成田山御利生記」「魯文記」「直政画」とあり、図として平将門と依藤太秀郷を配している。見返しの題には、「相馬旧事絹川新話／成田山御利生記」。内題・尾題はA本のままで「成田山靈験記」。見返しには馬印の幟旗と鉄扇が描かれ、「相馬旧事絹川新話」と角書が付され、こちらを早印と判断したいのだが、改修本（後掲C本）にも同一表紙が用





図版 3

確認するに「英名八犬士」の八編は辰九改（安政三年）、「義経一代記図絵」は安政三年、「国芳雑画集」は安政四年刊、よってそのころの刊行か。品川屋久助と伊勢屋忠兵衛の接点は、前掲『諸問屋名前帳』の「安政二年八月転宅同上新蔵店改名久助」が関わるだろう。

さて、今回特に注目したいのは、摺付表紙は「成田山御利生記」「魯文記」「直政画」とあり、平将門と依藤太秀郷を配するなど、このB本と同じであるが、本文の振仮名の削除や本文版木の彫り直しなどが確認できる一部改刻本にあたる次のC本である。

【C本】成田山御利生記（なりたさんごりししょうき）

⑥ 版元 後ろ表紙欠のため不明

⑧ 構成 表紙・見返し・序文半丁・口絵二丁・上巻本文二

二・五丁（うち挿絵7図七丁分含）・下巻本文二二三丁

（うち挿絵8図八丁分含）。

⑩ その他 成田山仏教図書館本（ロ24-5）

摺付表紙には「成田山御利生記」「魯文記」「直政画」とあり、平将門と依藤太秀郷を配した構図と、ここまではB本と同じ。しかし色摺が異なる。見返しに馬印の幟旗と鉄扇が描かれる点も同じだが、色摺一枚が欠落。巻末の版元記

載だが、B本に存した下巻廿三丁裏の「神田松下町伊勢屋忠兵衛板」が削られている。本文挿絵の改修の具体例については次章にて述べることにしたい。

このC本と本文同じで、摺付表紙でなく表題を異にした二冊本も存する（C2本）。

## 【C2本】

成田山靈驗記（なりたさんれいげんき）

①書名 表紙題・見返し題による。

②ジャンル・書型 切付本二巻二冊。

④作者・画工 鈍亭魯文述。

⑥版元 一書堂蔵版。

⑧構成 表紙・見返し・序文半丁・口絵一丁・上巻本文二一・五丁（うち挿絵7図七分含）・後ろ表紙・下巻表紙・下巻本文二三丁（うち挿絵8図八丁分含）・後ろ表紙。

⑨奥付・広告 ナシ。

⑩その他 禾口庵文庫蔵本。C本と同じ版ながら、摺付表紙ではなく、見返しに「一書堂蔵」と版元を明らかにする。C本とC2本の先後関係だが、表紙絵の版木利用からひとまずC本を先と位置づけておく。

見返しには「鈍亭魯文述／成田山靈驗記／一書堂」。内題・尾題とも「成田山靈驗記」。表紙題・見返し題・内題とも同一である。摺付表紙ではなく、鳥の子色楡皮模様空捺の表紙に、左肩子持ち枠題簽で「成田山靈□□□□」成田山靈驗記 下』とある。見返しは共紙に縹色摺にて「鈍亭魯文述／成田山靈驗記／一書堂」。この「一書堂」については未詳。A・B本巻末には「神田松下町伊勢屋忠兵衛板」とあったが、C・C2本とも削除される。C2本がB本以後



図版 4

の摺りであることは、本文の削除改修等の箇所から明らかである。したがって今のところ、当世堂より一書堂に版の委譲にあったと考えて宜しかろう。二冊構成であり、C本の上製本にあたる。

A・B・C・C2本に存した序文・口絵をカットして、表紙と本文冒頭の版木一枚を新たに改刻本がD本である。

【D本】成田山御利生記(なりたさんごりししょうき)《図版4》

②ジャンル・書型 切付本二巻一冊。

③刊年 未詳。

④作者・画工 鈍亭魯文謹述、芳春画(表紙)。

⑤序跋 ナシ。

⑥版元 未詳。

⑦柱題 「靈驗記上」(三〜廿四)「靈驗記下」(一〜廿三)。

⑧構成 表紙・見返し部本文・上巻本文二三丁(うち挿絵7図七丁分含)・下巻本文二三丁(うち挿絵8図八丁分含)・後ろ表紙。

⑨奥付・広告 ナシ。

⑩その他 管見に及んだのは禾口庵文庫本と個人蔵本。

このD本のような造本は、摺付表紙をもつ後印本にそのまま垣間見られる特徴と言える。序文などのある書冊の後印本

## 改刻の在処（山本）

では、例えばA本の「安政元甲寅晩冬同二乙卯新春上梓」といった年次や序者の名前を削り、旧版とみせないことがある。加えて、その序文の内容が時代と齟齬するからか、摺板を少なくするためか、序そのものを廃するものも多い。D本では、C本の「表紙見返し・序文半丁・口絵一丁・本文半丁」に該当する版木三枚相当分を差し替え、序文・口絵をカットして、「表紙・本文」の版木を新たにしている。明治刷の切付本などで、表紙見返し部から直ぐに本文があり、丁付が「二」「三」などからはじまるものなどは後印と判断でき、注意すべき点であろう。

D本の摺付表紙には「成田山御利生記」「芳春画」とある。表紙絵は一梅齋芳春（歌川芳春）である。上下巻内題ともに「江戸鈍亭魯文謹述」。

今回特に注目し、今後の考察の手がかりとしたいのは、B本とC本との間に見受けられる改刻例についてである。

## 改刻の在処

版木の摩耗や、D本書誌に記した事情などの例にみるように、版を改めたり、一部を埋め木で補うことは、摺りを重ねた版本ではよく見られることである。この『成田山御利生記』（以後、統一書名として記す）にも多くの事例が見られるが、具体的な事例を一・二挙げてみたい。次の図版は、上巻十六丁裏十七丁表「貞世討死を極て将門に別る」（図版5・6）と、下巻八丁裏九丁表「不動明王尊体を現じて祐善に長剣を呑しめ智を授け給ふ」（図版7・8）の挿絵から抜萃した（丁数は柱刻に従う）。

同じ表紙絵をもつB本C本だが（上がB本、下がC本）、明らかにその絵に違いがある。版木を浚うのではなく、所謂おっ被せの例である。『日本版画便覧』（講談社・昭和三十七年三月刊）より鈴木重三の解説を引用しておく。



図版 5



図版 6



図版 7

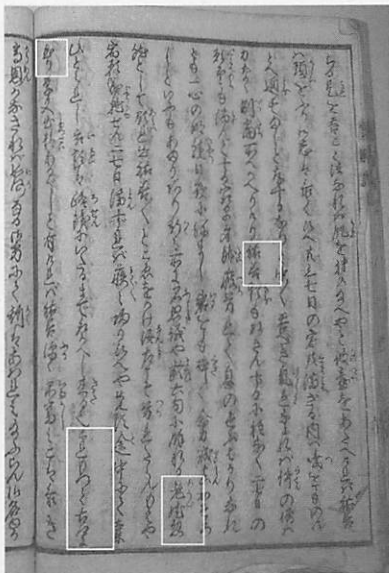


図版 8

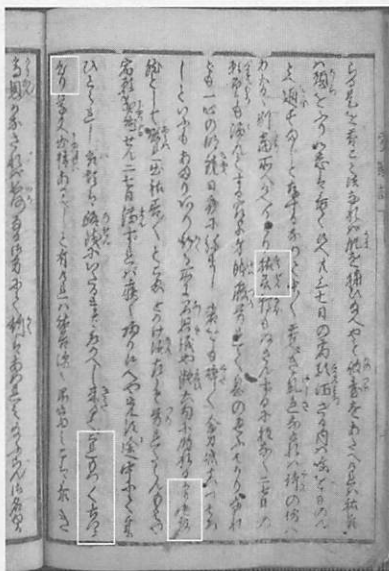
かぶせぼり(被彫・冠彫) 版本を重刊する時、その原版本の各葉をそのまま版下として版木に貼り込み、版刻すること及びその作品をいう。俗に「おっかぶせ」ともいう。版下に用いた原版本が消滅することはもちろんであるが、かぶせ彫の絵画の作品は原版本と比較すると、概して彫版の細部に粗略さが見られ、彫り出された線に生氣がなく、全体の感じが平板的である。又版本に版下を貼る時、収縮してやや寸の縮る傾きもある。

それにしてもなぜこんな手間をかけたのだろうか。素朴にそうした疑問を呈するには訳がある。幕末期の合巻類や、その明治刷本を多く目にしていれば、言い方は悪いが適当にうつりが悪くともよい挿絵部分などでは、特に版木の摩擦に任せて刷り続けられていたはずである。本文ですら、判読できるか疑わしいものも多い。例えば馬琴の合巻などでは「板本ハ今以板元ニて摺出し候へ共、摺つぶし読かね、且又悪本ニ成候」(天保十一年八月二十一日桂窓宛代筆書簡)と、「摺つぶし読かね」るものも引き続き売り捌かれていた。一方、今回の『成田山御利生記』では修訂の用

改刻の在処 (山本)



図版 9



図版 10

例は数十箇所にもぼる。思うに、いわば開帳などの諸行事ごとに売り捌ける際物的な書冊であるということも関連していよう。後掲注記にも例示したが、その内容に重なりのある別本の存在は、成田山参詣者を目当てにし数多く売り捌けるが故の競合であつたろう。同様の例というわけではないが、古板と新板を綴じ交ぜて売ろうとする書肆の要望を断る馬琴の書簡の例も存する(天保三年十一月二十五日篠斎宛書簡)。商品としての書物という観点からすれば、書肆の行為、すなわち競合する商品への対策として、古いものを新しくみせる取り組みなどは必然のことであり、自店の書冊をより売り捌くためには、被せ彫りという手間をかけることも厭わなかったはずである。表紙模様を替え、目新しい書冊にみせることがなされたはずである。今回確認したように、そのバリエーションの多さは、何も文芸的に優れているといった作品内容としての価値では測りきれない、その取り扱う対象そのものの背景、刊行時期など周辺の事どもにも留意する必要性を気づかせてくれるのである。

もう一つ注目したい。次に掲げるのはB本C本の本文（下巻7丁裏）における埋め木（象嵌）の例である（図版9・10）。合巻における役者似顔などの場合で、後印時、その登場人物の顔に象嵌を施す例がある。はやりの役者への変更などの場合も多い。ただ図版の白枠囲み部分をまとめた以下の本文②③などは、むしろ改悪された象嵌の例と言える。

A本

① 祐善猶もぬきんずるに

↓  
祐善猶もぬきんずるに

② 老姥忽然として

↓  
かり姥忽然として

③ くれもつて古郷に至り

↓  
くれもつく古郷に至り

C本

①はルビを後印時に追加で振る例。本作の他の用例ではルビを省略している箇所も多い。振り仮名は長年の摩耗を考えると、字が潰れやすく後印で削られることも多く、追加をするためには埋め木をしてかかる必要が生じるのである。

②③の例はどうか。これは、訂正をするための象嵌ではなく、寧ろ改悪といってよい。部分のみの埋め木でありながらなぜこんな誤りが起こるのか。前掲『日本版画便覧』（講談社・昭和三十七年三月刊）の鈴木重三の解説を踏まえらば、版本を重刊するとき、あるいは版木摩耗等により象嵌がなされる時、原版本を版下として版木に貼り込むことになる。しかし、こうした例を見ると、果たして原版本を版下として本当に利用できたのだろうかと思ふ。合巻など、大量に消費されるものの場合、刷りの良いものを書肆が残しているとは限らない。版の写りの悪い場合、質の悪い紙に摺られた場合、貼り込んだものから版をつくることは果たして可能なのか。特に細かな文字からなる合巻や切付本の場合で考えると、原版本を版下として用いる事がなされたかは甚だ疑わしい。一つの版が摩耗したとき、その類版は如何にして作成されるのかといった問題を含め、まだまだその工夫が解明されているとは言えないのでは

あるまいか。

現代だと『浮世絵「名所江戸百景」復刻物語』(芸艸堂・二〇〇九年刊)にあるように、「原画をカラー印刷用の四色に分解し、二層漉きの和紙に原画と同じ寸法に印刷したものを版下として」用いたという。そうしたことは古き時代には難しいことである。ヒントはある。『日本版画便覧』の「複製版画」の項に「既に来上がっている絵を模写した木版面。制作工程は浮世絵系の版画のそれと全然同じ。ただ版下は古くは原画を薄い紙に透写して作ったが、今は多くは写真撮影してその生フィルムを用いる」(鈴木重三解説)とあった。一旦、原版本から薄葉紙に透き写して文字線を明確にし版下にしていた具体的事例については改めて別の機会に確認するとして、原版本を版下とするにせよ、透き写しをした上で版下とするにせよ、そうした作業工程のなかで、元々の文字が判別しがたい時に②③のような事態が招来したのであろう。元のもの刷りが悪ければ次に刷る物に誤りが生じるのは至極当然のことなのである。「私は先輩諸氏の指導の下に、六七年以来稀書複製会の刊行事業に従つてみますから、古版物の複製について相應の苦心を重ねました。複製は新版とちがつて、原版摺の種本があるのだから、其儘に彫つて摺りさへすれば単純な仕事のやうにも思はれますが、実際の苦勞は軽少でありませぬ」(「頽廢しつゝある我が木版術」『版画礼讃』東京春陽堂・大正十四年七月再版)とは、稀書複製会の刊行事業にたずさわった米山堂主人の發言であつたが、後印本、改刻本を巡つては、その作業の有り様などまだまだ説明すべき問題は尽きないのである。

〔注〕

(1) 魯文には、このほかに全く別の版による「成田御利生記」がある。確認し得たのは二種。一点は禾口庵文庫蔵本で、平将門伝承のみをあつかったもの。もう一点は個人所蔵で二点確認。「成田御利生角力仇討」「成田靈驗



記」「成田山御利生記」を合綴した『利生替仇討』である。

【別本E】将門退治／成田御利生記（まさかどたいじ／なりたごりしゅうき）

- ①表紙題による。内題・尾題は「成田山御利生記 全」
  - ②切付本一冊。仮綴。
  - ③刊年記載なし。
  - ④東武金屯道人謹述。
  - ⑤序文なし。
  - ⑥当勢堂（品川屋久助）蔵版。
  - ⑦柱題「成田利生（一〜八）」。
  - ⑧表紙・本文七・五丁。挿絵ナシ。
  - ⑨奥付なし。
  - ⑩禾口庵文庫蔵。刊年記載なきものの、魯文が金屯道人と称した書目を確認するに安政三年以降と目される。  
【別本F】利生替仇討（りしゅうほまれのあだうち）
- ①表紙題による。
  - ②切付本三卷一冊。
  - ③刊年未詳。
  - ④金屯道人謹述、芳幾画。
  - ⑤序文ナシ。

⑥ 当世堂梓（見返し）

⑦ 柱題「成田角力」「祐天」「成田利生」

⑧ 表紙・見返し・口絵半丁・「成田御利生角力仇討」本文十五丁（うち挿絵六丁半）・「成田靈驗記大全」本文十五丁（うち挿絵七丁半）・「成田山御利生記全」本文十四丁半（うち挿絵七丁）・後ろ表紙。

⑨ 個人蔵。

見返しは「利生登ノ仇討」。内題は「成田御利生角力仇討」「成田靈驗記大全」「成田山御利生記全」。著者は

各内題下に「荏土金屯道人謹述」「江戸金屯道人敬白」「東武金屯道人謹記」とある。挿絵端書等を紹介する。

※口絵半丁（将門の図） ……半丁

※「大八が盗心に求女伯父をあやまつ」

※「伊豆の海岸に大八小角力らと力をこゝろむ」

※「滝見山毒牛をくだして雲の戸をくじく」

※「孝勇孝子をとまなひて綾川がもとにいたる」

※「孝子大八にあふて無念をます」

※「年来のうらみ大八を砂上にころす」

※（挿絵半丁）

…以上「成田御利生角力仇討」

※「成田へ詣みちにて祐全山賊にあふ」

※「不動明王尊体を現じて祐全に長剣を呑しめ智をさづけたまふ」

※「与右エ門絹川の辺にて妻かさねを害す」

※「累が怨靈きくまつはる」

※「累が悪靈与右エ門にうらみをのぶ」

※「祐念和尚累が靈を教化したまふ」

※「祐全大僧正御化益説法す」

※（挿絵半丁）

…以上「成田靈驗記大全」

※「将門純友比叡山上に会して謀叛を企つ」

※「将門謀叛国香が勢と戦ふ」

※「秀郷将門に会して人主の器にあらざるをしる」

※「貞世討死をきはめて主に別る」

※「五郎貞世討死」

※「将門力戦大勇をふるふ」

※「将門貞盛が矢にあたりて最期秀郷首をとる」…以上「成田山御利生記全」

記載内容からみて別本E「将門退治／成田御利生記」の本文に挿絵を加えたものが本書所載「成田山御利生記」の原型である。とすれば「成田御利生角仇討」「成田靈驗記全」も同様に八丁程度の小冊子が刊行されているのではないかと目される。

◇本稿は、二〇〇八年の仮名垣魯文研究会第8回研究大会での発表「魯文『成田山御利生記』諸本考」と、二〇〇九年の同研究会第9回研究大会での発表「『成田山御利生記』追補ならびに『百猫画譜』に関する覚書」を基礎稿とした。発表に際し、貴重なご意見をたまわった皆様に深謝申し上げます。